

## 小田急分譲地の地域活動への関わり ～横浜キャンパス周辺住民と学生の交流

横浜キャンパスの北門近くの小田急分譲地では、住民たちの高齢化が進むなか、民生委員が中心となった地域内の支え合いの活動、公園愛護会活動、防犯パトロール、趣味のサークル活動など、住民の交流と連携が活発に行われている。2008年1月以来、小田急で行われている地域活動の一部である「サロンすみれ」（助け合いの会「すみれ」が運営する茶話会）、「しあわせの会」（地域の高齢者に月1回、手作りの昼食とデイサービスを行う会）、公園清掃（公園愛護会が地域内の公園を清掃・整備）に明学生が加わって、住民の方とコラボレーション活動をする機会をいただいている。同年3月からは小田急分譲地内で地域活動を行う学生グループ「あったかサークルひまわり」として、上述の地域活動を続けてきた。筆者は2008年8月より担当者として住民と学生の交流の促進と協力関係への支援を行っている。

今年度はこうした明学生による地域活動への関わりを継続し互いの関係をさらに深めていくこと、活動をはじめたメンバーの多くが4年生となったため小田急での地域活動を行う下級生を育てること、そして昨年度よりあったかサークルひまわりが準備を進めてきた「あったか交流会」の開催の支援などに取り組んだ。

進級に伴いひまわりの学生全員が白金校舎在籍生となっていたが、学生たちは授業や就職活動の合間を使って、しあわせの会、サロンすみれ、公園清掃の活動を続けた。一方、昼休みに横浜・白金両ボラセンにて行った「ひまわり喫茶ギャラリー」（ボラセンでお茶を飲みながら、小田急分譲地での活動を紹介）では、地域活動の魅力を伝えるとともに活動に加わるメンバーを募集した。コーディネーター（筆者）も小田急での地域活動の魅力を学生たちに伝えたとこ、除々に活動に興味を持つ学生が増え、上述の活動に参加するようになった。

毎年恒例の7月中旬の小田急分譲地自治会主催の夏まつりには、ひまわりメンバーとともに、横浜校舎に在籍している学生が盆踊りに加わったり、模擬店の売り子になったりした。上倉田地域の自治会長が7月から8月にかけて企画した「倉田の歴史を学ぶ」に学生やコーディネーター（筆者）が参加した。今は開発が進んだ倉田の地域だが、水田開発の歴史や苦勞、柏尾川の洪水に悩まされた歴史があることを知り、地域の方からたくさんのことを学んだ。

また7月後半よりひまわり主催「あったか交流会」の準備が本格的に始まり、ボランティアセンターは学生たちの活動を支援した。小田急分譲地の住民の方たちを招待する初めてのイベントであるので、学生たちはどうしたら住民の皆さんに楽しんでもらえるのか、学生の住民の皆さんへの感謝の気持ちが伝わるのか、熱心に話し合いや準備を重ねた。普段の学生たちの生活の様子を具体的に知ってもらおうと、通学の様子や授業、学食での昼食の様子等を紹介する「明学生の1日」、学生たちが行ってきた活動を紹介する「思い出アルバム」、これまでしあわせの会に参加した学生が結成した「そらいろ音楽隊」に

よる演奏などを準備した。ところが9月になり交流会を翌週に控えたある日の夕方、横浜学生スタッフの新型インフルエンザ感染が分かった。ちょうどその日中には、交流会準備のためにひまわりメンバーも横浜学生スタッフとともに横浜ボラセンで活動していたため、万が一の感染拡大を心配して、高齢の方を大学に招待しての交流会は、やむなく延期することになってしまった。

9月のサロンすみれではある男子学生が折り紙で紙飛行機を作った。それが紙飛行機キャッチボールのようになり、住民の方々は声を上げ体を大きく動かしながら楽しんでた。普段は静かにお茶とお菓子を楽しむ場がにぎやかになり、「孫へのお土産になるわ」「子どもみたいに夢中になって楽しいわね」と好評だった。

秋学期にはひまわりメンバーと横浜校舎に在籍している学生が一緒になって、公園清掃や上倉田地区の秋祭り、サロンすみれ、しあわせの会に参加した。12月のしあわせの会では、折り紙を使って住民の方と一緒にクリスマス飾りを作ったり、サプライズ企画でサンタクロースの格好をした学生が登場した。

今年1月21日には、インフルエンザの為延期していた「あったか交流会」をあったかサークルひまわりの主催で開催した。当日は小田急分譲地の12名の住民の方がおいでくださり、ひまわりの学生に、横浜校舎に在籍している学生、そらいろ音楽隊の代表学生が加わって、一緒に昼食を囲んだ。どのテーブルでも話が弾み、なかには住民の方に交じって学生も味噌造りに参加させてもらう話までが生まれた。昼食後にはそらいろ音楽隊の代表学生がフルートで伴奏をしてみなで合唱したり、学生全員から住民のみなさんへこれまでの感謝の気持ちを伝えるなど、学生たちは心を込めておもてなしをしていた（「そらいろ音楽隊」については、本書69～70ページを参照）。住民の方たちからは「学生さんたちとゆっくり時間を過ごすことができ、本当に楽しかったわ」という感想をいただいた。ごく近くに住んでおられるにも関わらず初めて大学にいらっしゃった方もあり、学生が地域の方をお招きする意義は大きいと感じた。

明学生が小田急分譲地での活動に参加するようになって2年が経過した。住民の方はいつも快く学生たちを受け入れてくれ、ときには学生たちが住民の方の家にお邪魔したり、また怪我をして入院した住民に学生がお見舞いの手紙を用意したりなど、地域と学生の距離は縮まっている。そうした交流の積み重ねにより、学生と住民の方との会話の中身は家族の話や悩み、進路についての相談など、個人的な話に及ぶこともある。小田急での活動を通して、学生たちは人生の先輩から人への気遣いや地域内で協力し合うことの重要性を学び、世代の違う人との人間関係を築く力を養っている。ある学生は「これまで社会のなかで自分の居場所が分からなかったけれど、自分の生かし方が分かった」という変化を語っていた。最近では「クリスマス行事だから何かしてくれない？」「学生たちが何か企画をしてくれるのを楽しみにしているわ」とリクエストをもらい、住民の方たちからの期待が大きくなっている。今後はこうした地域と学生の関係を大切にして、住民と学生の関係がより開かれ、学生が地域の一員として、学び育っていくことをボランティアセンターとして支援していきたい。（糸井）

## 「戸塚区民市」を拠点とした地域と学生の交流の広がり

2007年6月より本格的な工事が開始された戸塚駅周辺の再開発は、大型スーパーの開店やバスターミナルの整備により利便性が高まる一方、これまで商店街で営まれていた人々の交流が壊されかねないという不安を地域住民に抱かせるようになった。戦後から発展を続けてきた戸塚駅西口商店街は、住民にとって買い物だけでなく生活に必要な情報や知恵を得る交流の場でもあった。商店街が大型店舗に建て替わることで地域内の人間関係や生活も解体されてしまうことに危機感をもった商店街と住民たちによって2008年9月に始められたのが「戸塚区民市」である。

学生たちは戸塚駅を利用していても、再開発の影響で商店街や住民生活の基盤が揺るがされていることは知らずにいた。ところが戸塚図書館30周年の行事でコーディネーター（筆者）と知り合った商店会長が2008年11月にボランティアセンターを訪れ、「これまで培ってきた人と人のつながりがなくならないように、街が元気になるように、明学生にも手伝ってほしい」という言葉に動かされ、12月より「区民市」に横浜学生スタッフが区民市に加わるようになり、今年度からはボランティアセンターによる地域・学生との連携プロジェクトの一環として活動が展開されている。

学生スタッフは区役所の駐車場で開催されている「区民市」の店先に、商店街の人と共に立っている。毎月1回開催されるこの市場では地場野菜や米、和菓子、惣菜などの品物を販売し、お年寄りや家族連れなどが買い物にやって来ている。学生たちは毎月欠かさず店を手伝い、お客さんへの温かな声かけの仕方を学んだり、野菜の料理方法を教わったり、商品が売れるまでの苦労や工夫を知ったりと、長年地域で商店をしてきた店主から学ぶことは多い。こうした人との触れ合いがさかんな区民市で活動するうちに、学生たちも「黙って買い物をしているスーパーよりも、お店の人とお客さんが楽しく会話している区民市の雰囲気が好き」「戸塚に生まれ育ったけれど、『区民市』に関わるようになってから、戸塚も悪くないかなと思うようになった」「店を手伝っている奥さんとは、冗談を言い合ったりしてまるで親子みたい」と、参加した学生一人ひとり、区民市での人々のつながりの良さを実感するようになった。

図書館のイベントで商店会長から声をかけられた国際協力を行うサークル「なんとかなるさ」[JUNKO Association]「あちよみだ」も、2008年12月より「区民市」に参加してブースを設営している。学生たちがテーマとしている不公正貿易の解消、ベトナムやミャンマー教育環境の改善、タイの山岳民族が抱えている問題等について、「区民市」に訪れる地域住民に関心を持ってもらいたい、買い物を通して国際協力に参加してほしいと呼びかけを行っているが、学生たちがこれまで関わってきた国際協力系のイベントと違い、途上国が抱える問題に関心が向いていない客に対して、どのようにしたら関心をもってもらえるのかと試行錯誤が続いた。今年度の当初、学生たちは商品を買ってもらえることだけに意識が向きがちであったが、試食品の提供をきっかけにお客と会話したり、ベトナムのおもちゃを使って子どもと遊んだり、お客とのコミュニケーションを活発にすることが活動に関心を持ってもら

うきっかけとなりそれが結果として商品の購入にもつながること、自分の店だけのことを考えるのではなく、周囲の店と声をかけ合い協力し合うことで、「区民市」全体が盛り上がっていくことなど、活動の基本は人とのコミュニケーションや人間関係づくりであると実体験をもって学んでいった。

こうした区民市での活動を進めているなかで、横浜学生スタッフは地域と学生が交流の輪を広める活動を作りたいと、6月に開催された横浜開港150周年記念・戸塚区民市にていくつかのワークショップを企画した。会場に掲げる横断幕の色塗りを来場者と学生がともに行うもの、七夕に合わせて戸塚への思いを短冊に記してもらうもの、学生スタッフがメンバーとなる「手話サークルほっけ」に協力を呼びかけて実現した、手話歌のステージイベントなどである。その場にいた中学生が手話歌のパフォーマンスを見て真剣に覚えようとしていたり、親子で夢を語り合う光景があったりと、区民市という場で地域と学生が出会い地域内での交流を促進する役割を果たし始めていた。11月には学生スタッフの一人が高校時代の恩師の協力を得て「ダブルダッチ（縄跳び）」のパフォーマンスを行った。学生が配布したチラシを見て、楽しみに来訪した親子がおり、活動の手ごたえを感じていた。

一方こうして区民市を通して商店街や住民たちの協力や交流が活発になることにより、大型店に押されて店を閉めようと悩んでいた店主が店を継続しようと思ひ直すという例も出てきてきた。

「区民市」での活動を通して、地域の大人たちが再開発の渦の中でも、住民同士が力を合わせて困難に立ち向かっている姿を間近で見ることで、学生たちの意識も変化している。「おじさんたちも自分の道を進むために頑張っているのだから、僕も自分の夢を叶えるように努力をしなくてはいけないと思う」とある学生は日々の生活への意識を新たにしていた。また別の学生は青森物産市で故郷の人たちと一緒に青森の魅力や名産を伝えていく仕事に魅了され、「将来は地元青森の良さを日本全国に伝える仕事をしていきたい」と、将来の夢を力強く語っていた。

このように学生と地域・社会との新たなつながりを生み出す「区民市」を通して、今後さらに地域と学生がどのように協働を進められるかについて意見交換をする懇談会を学生スタッフが企画した。11月14日に「Do for とつか～地域と学生の“わ”を広めよう」と名付けられたイベントが、横浜学生スタッフが主催して横浜キャンパスで開催され、当日は学生と地域（商店街、区役所、NPO、とつか区民活動センター）が地域の様子や取り組みの内容、課題を報告し合い、今後の可能性を話し合った。世代が違う学生と地域商店街との協働は、いつもすんなりと進んでいる訳ではなく、双方が期待していることがそのままスムーズに進むこともあればそうでないこともあるが、「戸塚を元気にする」という共通の目標に向かって協力関係を継続・発展させ、相互理解を深めていっていることが協働の価値だといえる。再開発ビルは街に姿を現し、2009年12月にその一部がオープンした。戸塚駅周辺の変化のまっただ中にあるが、「街が元気になる」という目標に向けて、地域、学生、ボランティアセンターが協働し、歩みを続けていきたい。

(糸井)

## 地域作業所「Ange」と学生のコラボレーションの進展

ボランティアセンターでは、昨年度より横浜キャンパス正門近くにある発達障がい者たちの就労支援施設「横浜 YMCA ワークサポートセンター・パン工房 Ange」と明学生の協働を支援してきた（詳しくは『ボランティアセンター報告書 2008』参照）。昨年度は横浜学生スタッフや国際協力系の3つのサークル（タイの山岳少数民族支援をサポートする「あちょみだ」、フェアトレードの推進をする「なんとかなるさ」、ベトナム・ミャンマーの教育支援を行う「JUNKO Association」）が、クリスマス会や戸塚駅前での募金活動、柏尾川の清掃、学内でのパン販売等により交流を行ってきた。

今年度、横浜学生スタッフは Ange と明学生の協力関係の基盤が出来上がったとして退いたが、昨年の交流と協力関係を土台にして、前述の「あちょみだ」、「なんとかなるさ」、「JUNKO Association」が、タイやベトナムの村などで仕入れてきた雑貨を Ange の店頭で販売して途上国を支援しようという取り組みを、ボランティアセンターが支援しはじめることになった。

新入生を迎える4月の時期に合わせて、第1回目の雑貨販売イベントを開催することにした。チラシを見た近隣の住民、ポートヘボン（学生用のポータルサイト）で情報を得て興味をもった新入生らが立



Ange 店頭でのアジア雑貨販売

ち寄るなど、新たな交流の広がりを感じていた。春学期には毎月1回計3回実施した。学生や通所者たちが店頭で声を上げて販売することで、普段は静かな店の周辺に活気が出た。雑貨販売イベントがきっかけとなって、Ange が周辺地域にチラシを配布したことで、店の認知度が上がったり、明学生と協力関係が築かれたことにより、学生間で Ange が知られるようになり、Ange 店内と明学での双方

のパンの売り上げが上がったという影響も広がっている。学生にとっては対面で販売することで、国際協力に関心をもつ住民や学生と出会い、交流するきっかけとなっていた。

その後9月より、活動は軌道に乗ったとして Ange と学生による自立した活動として移行した。秋学期には Ange の都合で実施できなかった月を除き、月に1回計2回雑貨販売イベントを実施した。このほかに、雑貨販売や夏休みの交流会を通して関係が深まった「あちょみだ」と Ange の女子メンバーが、若い女性として共通の悩みを語り合う交流会を11月に横浜キャンパスにて開催した。これは「子どもから大人へと成長していく際の体の変化に対する戸惑いや不安な、悩みを出し合うことで、自分の体を見つめなおすきっかけづくりをしたい」と、「あちょみだ」が提案したものである（詳しくは、本書 65～66 ページを参照）。Ange と明学生が交流を始めた当初は、学生と同世代となる Ange の女子メンバーとの間には距離があり Ange の女子メンバーは学生との交流に積極的ではなかった。

しかし交流を重ねるうちに、次第に打ち解けあい「女子同士の交流の場を今後も続けていきたい」という提案が Ange の女子メンバーから出されるようにまで深まった。

これまでの活動を振り返ると、国際協力に関心が向いていた学生たちは当初通所者との関わりをどこか身構えていたところがあったが、友人同士として気さくに話ができるように変化した。しかし Ange と学生の連携は常に順調だった訳ではない。販売イベントを開催したもののうまく売れずにながかりしたり、連絡がうまくいかずに今後続けられるか不安を感じる時もあった。しかし、そのたびに Ange と学生とが話し合って解決の糸口を探したり、ボランティアセンターが必要に応じてサポートをしたりして一つひとつ乗り越えてきた。学生たちはそうしたプロセスのなかで、対話や相互理解、計画性、迅速で臨機応変なコミュニケーションの重要性など、双方が協力し合う上での基本的な姿勢やスキル、忍耐を身につけていった。大学のキャンパスを飛び出し地域で生活する隣人と共生関係を紡いでいける資質と能力を備えた学生たちが、育ててくれていることを頼もしく思っている。

学生たちの活動は、とかく一過性になりがちだと言われることがある。今回の取り組みが、学生のなかで確実に受け継がれ地域のなかで育っていくことを、活動のきっかけづくりをしたセンターは期待している。そのためには「なぜこの活動を始めたのか」という原点を常に意識し活動を通して得られた実感や手ごたえを大切にして、考え行動し続けていってほしいと願う。センターも、明学生の地域での活動を応援し続けていきたい。

(糸井)

## 横浜ボランティアセンター報告

### ～戸塚地域との連携と横浜ボランティアセンターを拠点とした活動の支援

今年度の地域連携と横浜キャンパス在籍生への支援活動について報告したい。

横浜キャンパスの位置する戸塚地域との連携で、ボランティアセンターが恒常的に関わり実施している活動は、小田急分譲地の住民たちによって展開されている地域活動への参加、及び商店街や住民等が地域活性化のために行っている「戸塚区民市」への参加がある。(詳しくは、本書 46～47 ページ、及び 48～49 ページ参照)

明治学院大学は昨年度より戸塚駅周辺の魅力づくりと戸塚区の中心を流れる柏尾川の環境保全をねらいとして、戸塚区役所、戸塚地域の環境保全グループ、企業、学校等で構成する「柏尾川魅力づくりフォーラム」に構成団体として参加してきており、2009 年 11 年の規約制定により賛助会員となった。ボランティアセンターは本学の地域連携推進室から依頼を受け、コーディネーター(筆者)が同フォーラムの実行委員のメンバーとなり、フォーラムが主催する柏尾川清掃活動や啓発活動の企画と学生への参加呼びかけを行った。また同フォーラムが戸塚区政 70 周年記念イベントとして 5 月 31 日に開催した「戸

塚駅周辺魅力アップキャンペーン in 柏尾川」では、応援団チアリーディング部「CHEERLY SCARLETS」と「ジャズ研究会」がステージイベントに参加して来場者と交流した。今年3月7日に行われる清掃活動には、毎年参加しているアメリカンフットボール部「SAINTS」の他に、新たにジャズ研究会、戸塚で子どもと遊ぶ活動をする学生グループ「JRP (Judicial Relationship Politics)」ら、多数の学生が環境保全を行う市民グループ、地域の住民、ブリジストン社員らとともに参加する予定である。

この他に学生と戸塚地域とのコラボレーション（協働）の支援に取り組んだ。国際協力活動を行う学生サークルと横浜キャンパス正門近くの地域作業所「横浜 YMCA ワークサポートセンター Ange」が連携して行った、Ange 店頭でのアジア雑貨販売活動の立ち上がりにおける支援である。（詳しくは、本書 50～51 ページ参照）

ボランティアセンターのパートナーとして活動している横浜学生スタッフは、「地域と学生の架け橋」となるという目標の下に「戸塚区民市」や戸塚最大の祭り「納涼祭」、大学正門そばの倉田小学校にて行われた倉田小地区地域防災訓練への協力等、年間を通じて戸塚地域でのさまざまな活動に参加してきた。（詳しくは、本書 54～57 ページ参照）

横浜ボランティアセンターは学生から、例えば夏休みや春休みに行える活動の紹介や相談、ボランティアサークルの活性化など、さまざまな相談を受けている。コーディネーターが日々の相談業務のなかから学生の思いを受け止め、それを支援することで活動が新たに立ち上がる例もある。昨年横浜ボラセンが支援して動きだした「あちょみだ」や「こ・こ・ろ」は、すでに自立した学生グループとして活動しているが、今年もあちょみだがタイ現地で行うプロジェクトの一部や国内の大学近隣地域との連携方法等やこ・こ・ろが行う外国につながる高校生らを招くミニ・オープンキャンパスの準備についてなど、必要に応じて支援してきた。この2つの学生グループは、それぞれに2009年秋に募集された第9回ソニーマーケティング学生ボランティアファンドから助成を受けることが決まり、今後はさらに活動の体制が整うのではないかと期待している。

そういった先行事例に刺激を受けてか、今年は「活動を立ち上げたい」と明確に伝えた上で相談を受けることがあった。法学部政治学科のある学生たちは「社会に役立つ活動を何か行いたい。活動を立ち上げるにはどうしたらいいか」とセンターに来室した。コーディネーター（筆者）は学生たちがどんな活動に関心をもっているのか、何を指すのかという問題意識を受け止め、ボランティアセンターに寄せられている地域からの要望を伝えたり、相談にきた学生たちの個性を生かした活動例を助言したりした。そうしたやりとりを進めるうちに、学生たちは徐々に活動の形を作っていく、その結果大学生と子どもたちが体を使って遊ぶ活動を戸塚地域中心に行うことになり「JRP (Judicial Relationship Politics)」という活動グループができた。戸塚の舞岡台自治会の夏祭りでは、学生が企画した「腕相撲

<sup>1</sup>「あちょみだ」は「ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2009」も受賞している。

大会」が大人気であった。11月には横浜・湘南地域で開催された「オレンジ・リボンたすきリレー（児童虐待防止キャンペーン）」のスタッフとして参加し、また今年3月には戸塚の地域住民が行う桜祭りにも参加予定であり、子どもたちのお兄さん、お姉さんとして期待される活動グループになってきている。

小田急分譲地の地域活動に参加した、ある学生は「しあわせの会」（デイサービス）でのフルート演奏を住民の方から喜んでもらったことがきっかけとなり、「地域のお年寄りや子どもたちに音楽の楽しさを伝える活動によって、ボランティアファンド学生チャレンジ賞に応募したいのだが」という相談を持ってきた。コーディネーター（筆者）は地域からのニーズ、活動のコンセプトづくり、今後の展開の可能性等に助言を行った。その結果「そらいる音楽隊」という学生グループを作って「届けよう！音楽の楽しさを～ Music Delivery Project～」という企画により、今年度ボランティアファンド学生チャレンジ賞を受賞して活動を続けている。（詳しくは、本書69～70ページ参照）



舞岡台自治会の夏祭り「腕相撲大会」

このように横浜ボランティアセンターでは、ボランティアを始めたいと思う学生が既存の活動に参加するだけでなく、学生が主体となり新たに立ち上げる活動を支援するというセンターの特色が明らかになり定着してきている。今後は学生たちの主体性自立性を保ちながらも、その後活動をどう深めていくのか、例えば継続性や新たな展開など様々な問題に対する相談、支援の必要を筆者は感じている。今年度、横浜ボラン

ティアセンターが行ってきた活動を支えてきたのは、「継続性」と「対話（コミュニケーション）」と考えている。ここで紹介した活動の多くが昨年度に始まったもので、時間をかけながら地域・学生・ボランティアセンターが築いてきたものである。ボランティア活動には、唯一の答えがあるものでも予定調和的な世界でもないが、それぞれが自己を開きながら粘り強く対話（コミュニケーション）することで、可能性が開かれてきたと考える。

こうした活動が実現できたのには、ボランティアセンターや学生が相談やお願いをした際に、いつも快く協力して頂いた住民の方、NPO、区役所など多くの方々のお陰によるところが大きい。地域の方たちの厚意に深謝し、これからも地域、学生、ボランティアセンターとの協働関係が深まり発展するよう、力を尽くしていきたい。

（糸井）



## 横浜校舎学生スタッフ活動報告

2009年度、私たち横浜学生スタッフは新しいことに積極的に挑戦し、またボランティアに参加したいと思っている学生の後押しをするという意味を込めて「Action ～ひとつの行動からすべては始まる～」をテーマに活動してきた。

具体的には「地域と学生の架け橋」になることを目標に、学生が通学している横浜校舎がある戸塚地域との関係を深めていきたいと考え、その中心的な活動として毎月一回行われる「戸塚区民市」への参加や横浜学生スタッフが中心となって企画した「Do For とつか」にチャレンジした。昨年度から参加を始めた区民市は継続して参加することで地域の方々との関係がより深まった。またより多くの学生や地域の方々にボランティアの魅力を伝えたいと考え、ボランティアセンター通信のリニューアルやボランティアギャラリー、みなとみらい地区で行われた「ボラフェスタ」など新しい活動も取り入れてきた。

そして、企画をより良いものするためにミーティングを重ね、全員が意見を出し合い、企画を進行していった。

### 1. 戸塚区民市と Do For とつか～地域と学生の“わ”を広げよう～

#### 戸塚区民市

戸塚の商店街や住民たちが協力して主催している「戸塚区民市」がある。戸塚区役所の駐車場で開催される市場には主に「戸塚宿ほのほの商店街」や明学のボランティアサークル(JUNKO Association、なんとかなるさ、あちょみだ等)が出店している。区民市では戸塚地域で収穫された野菜、民芸品、地方の名産品の販売などが行われている。学生スタッフは主に射的やヨーヨー釣り、スーパーボールすくいなどの子ども広場を担当したり、また各ブースのお手伝いスタッフとして参加している。2008年12月以来私たち学生スタッフは区民市に関わってきているが、学生たちのアイデアを区民市に取り入れていきたいと考えるようになった。そこで6月には地域と学生の交流の輪が広がるような企画を行った。普段区民市ではお客さんたちは主に買い物に来ているだけだったが、そこに参加型のイベントがあったら楽しいのではないかと考え、来場者と学生が協力して横断幕を作成したり、戸塚に対する夢を短冊に書いてもらったりした。横断幕には学生スタッフが考えた「みんなで広げよう地域のわ」というメッセージを書き、来場者には「わ」の部分に少しずつ色を塗ってもらった。これは学生と地域の人が一緒になって、戸塚にさまざまな色を付けていこうという意味が込められている。また以前から運営委員会長からリクエストがあった音楽を使い、見て楽しめるイベントとして、学生スタッフがメンバーになっている「手話サークルぼっけ」に協力を呼びかけ、手話歌のパフォーマンスを行ってもらった。学生スタッフの自主的な企画はこれが初めてだったので不安も多くあったが、大人から子どもまで楽しんでもらった。完成した横断幕は、その後の区民市で飾られ、通りがかりの人の目を惹き、多くの人が区民市の会場内に集まってくれた。私たちは昨年度から区民市に参加し続けている。そういった継続した積み重ねのな

かで、学生と地域の方々がより深い交友関係を築き、戸塚の一員になることができると感じている。

今後の課題としては、区民市は大学内では一部の学生にしか存在を知られていないので、より認知度を上げ、また多くの学生に楽しんでもらえるように環境を整えることである。学生スタッフとサークルの学生、地域の方々が一緒に協力し合い区民市をお互いにとってより良いものにしていきたい。

#### Do For とつか～地域と学生の“わ”を広げよう～

区民市に参加するようになり「明学生は戸塚地域のことをほとんど知らず、また地域の方々も学生がどんな思いを持っているのか知らない」という課題に気づいた。そこで私たち学生スタッフはお互いをよく知り今後協力し合える関係を作るために交流の場を作りたいと考え、毎月の区民市への参加によって築きあげてきた関係を活かし、地域の方と学生の意見交換を行う「Do For とつか～地域と学生の“わ”を広げよう～」を開催した。参加者は学内からは戸塚地域で活動をしている明学のサークルを募り、地域からは区民市でお世話になっている戸塚の商店会長に学生との交流に関心のある地域やNPOスタッフの方に声をかけていただいた。今回は第一回目ということで「お互いのことを知り合う」ということを目的として、前半は参加団体がそれぞれ活動紹介のプレゼンテーションを行った。各発表の後には積極的に質問が出され、サークルの活動に協力したいと言ってくる地域の方もいて、これをきっかけに協力関係が広がっていく可能性を感じた。また、学生スタッフにとっても学内のサークルがどんな思いや目的で活動をしているのか詳しく知る良い機会になった。後半は「戸塚地域から見た明学生、明学生から見た戸塚地域」「お互いに求めること」「将来について」というテーマでフリーディスカッションを行った。国際系のサークルからの「国際色を出したイベントを戸塚区民市に取り入れたい」という声など、今後学生が地域でどのような活動したいかという具体的な意見も出された。初対面の人もいたが、地域の情報を交換し合いネットワークを広げることで今後協力し合える可能性が見えてきた。

この「Do For とつか」は横浜学生スタッフの2年生が中心となる活動としては、最後となる集大成の企画となった。学生スタッフがゼロから企画を立ててチャレンジした初めての企画だったが、この交流会を通して成果や課題を認識することができた。一年前にはお互いを知らなかった地域と学生が、毎月区民市で協力し合うことで、信頼関係が生まれていること、学生スタッフが架け橋になって、地域と学生の交流の場を作れたことは自信につながった。また「Do for とつか」での話し合いのなかで、学生と地域、それぞれの意見を聞くことが出来たのは大きな成果である。参加者に感想をアンケートに記入してもらったところ、今後も続けてほしいという意見が多かったので、来年度も開催したいと考えている。課題としては、当初はもっと多くの明学生やサークルに参加してもらいたいと、呼びかけをおこなってきたが、思うように人を集めることができなかった。また、今回出された意見やここで作られた地域と学生との関係を今後どのように活かしていくのか、どのように実現するかが今後の課題である。

## 2. 新入生を対象とした活動

4月から5月にかけて新入生に明学生が行っているボランティア活動について知ってもらうための活動を行った。具体的にはまず、ボランティアサークル合同説明会がある。今年度は過去最高の22団体の参加があり、また来場者も200人を超える学生が来場して、用意している資料を増刷するほどであった。次に、今年度初めての試みで各サークルが活動紹介を学生ラウンジで展示をした「ボランティアギャラリー」を行った。写真を媒体にすることで視覚を通して、新入生に明学のボランティアサークルを知ってもらう良い機会になった。横浜学生スタッフの登録希望者には、実際に活動を体験してもらうための「お試しボランティア」を企画し、戸塚区民市や栄区にある市民農園「荒井沢緑営塾」の農業体験に参加した。これら活動を通して新入生が学内のボランティアサークルやボランティアセンターについて知ることができ、新たな活動に取り掛かるきっかけとなった。

## 3. 戸塚地域での活動

「戸塚区民市」と「Do For とつか」以外の戸塚地域での活動を報告したい。5月には横浜キャンパスの大学祭「戸塚まつり」に参加した。学生スタッフの活動紹介の展示をボランティアセンターで行い、また学内でカレーを販売している地域作業所の手伝いなどをした。戸塚まつりは1年生と上級生が初めて協力して行った行事で、ここで作られたチームワークが一年間の活動の基盤となった。6月には「とつか・お結びフォーラム」でチーフとサブチーフがパネリストとして登壇し戸塚への思いを語った。10月の倉田小地区地域防災訓練では、前年に引き続き小学生を対象に手作りの紙芝居を使って地震や火事などの緊急時にどのように避難をしたらいいのかをクイズ形式で学んでもらった。昨年から二年続けて参加した学生は、成長した小学生との再会を楽しんでいた。この他に、8月には戸塚最大のお祭り「納涼祭」に参加したり、11月に「FM とつか」にゲストとして話をさせてもらったり、冬至と夏至のキャンドルナイトのイベント、東戸塚小学校の児童と遊ぶ明学のサークル「Let's Play ふろじえくと」への協力など、年間を通じてたくさん地域の方と関わる機会があった。

## 4. ボランティアを広める活動

学生にボランティアをより身近に感じてもらえるようにさまざまな角度から活動を行ってきた。まずボランティア活動の魅力を明学生や地域の方に伝えたいと「ボランティアセンター通信」を4月と11月に発行した。「Action」をキャッチフレーズに戸塚地域で学生スタッフが行う活動に興味をもってもらうよう紙面づくりを工夫してリニューアルしたところ、たくさんの人の手にとってもらえるものになった。また11月からは1年生が企画した1限が始まる前に戸塚駅に集合し、横浜校舎までの通学路のゴミ拾いする活動「どうせ登校するなら」に取り組んでいる。口コミで参加者が増え、UCからの留学生などいろいろな学生を交えた交流の場にもなった。その他には学生スタッフがおすすめるボランティア活動を書き出してボランティアセンターの入口付近にある掲示板に更新する活動に取り組んでいる。

## 5. その他の活動

11月には神奈川県赤十字血液センター主催の献血促進イベント「ボラフェスタ in KANAGAWA 2009」に参加した。関東学院大学と合同で来場者がゲームを通して献血についての理解を深めるコーナーを運営し、またイベントに関わった大学の学生が手話歌「いのちのリズム」を発表した。準備を一緒に行った関東学院の学生をはじめ、手話歌の準備等で他大学生と交流し、人脈を広げることができたので、今後お互いのイベントに参加し合う予定である。準備段階では、特定の学生に役割が集中してしまい、負担が大きくなってしまったので、今回は改善していきたい。

## 6. 今後に向けて

今年度は「Action～ひとつの行動からすべては始まる～」というテーマに沿って積極的に新しいことに挑戦することが出来た。その成果として「戸塚区民市」が学生スタッフの活動として定着し、「Do For とつか」など新しい企画を行うことができた。一方、2009年度は昨年度までとは大きく異なった活動を行ったので、初めてのことでばかりで手探りの中での活動は予想もしないこともあり、多くの人に迷惑をおかけしてしまうこともあった。また、学生スタッフ間で作業を分担しお互いに協力することで、もっと効率よく活動を進めることができたのではないかとこの反省もある。しかし、多くの活動を1、2年生が協力して行ったので、今後はさらに充実した活動が期待できると思う。来年度は、今年度の活動を継続して行うことに加えて、他大学交流や留学生と日本人学生の交流・学習支援活動などにも取り組んでいく予定である。

### 【横浜学生スタッフ 2009年度 年間行事】

4月	ボランティアセンター通信春号発行 15,22日 ボランティアサークル合同説明会 13-23日 ボランティアギャラリー 19日 戸塚区民市（新生生お試しボランティア） 26日 荒井沢緑営塾農業体験	10月	10日 Y150円商店街同時イベントとつか縁日 10日 倉田小地区地域防災訓練紙芝居 17日 戸塚区民市
5月	2日 新生生と顔合わせのミーティング 16日 戸塚区民市 30-31日 戸塚まつり 活動紹介の展示	11月	7日 ボラフェスタ in KANAGAWA 2009 10,24日 どうせ登校するなら（ゴミ拾い） 14日 横浜学生スタッフ主催企画「Do For とつか」 18日 FM とつか出演 21-22日 戸塚区民市 *ダブルダッチを実施 ボランティアセンター通信秋号発行
6月	13日 Y150円商店街同時イベントとつか縁日 *持ち込み企画実施 21日 とつかフリーステージ キャンドルナイト参加 21日 Let's Play ふろじえくと 27日 とつかお結びフォーラム&戸塚区民市	12月	15日 どうせ登校するなら（ゴミ拾い） 18日 とつかフリーステージキャンドルナイト 19日 戸塚区民市
7月	4日 プレゼンテーション練習会	1月	28日 大木農園農業体験（予定）
8月	7,8日 戸塚駅前盆踊り大会 16日 納涼祭	2月	13,14日 雪あそび in とつか（予定） 20日 戸塚区民市（予定）
9月	19日 戸塚区民市	3月	20日 戸塚区民市（予定） 23-25日 横浜学生スタッフ合宿（予定）

（横浜学生スタッフ チーフ 経済学部国際経営学科2年 富樫愛美）

（サブチーフ 国際学部国際学科2年 堀内友里菜）